

植物表象とイギリス近代文学

—文学研究における歴史主義をめぐる—

石倉和佳

1. はじめに

イギリス文学の作品には、様々な植物の表象が描かれている¹。このことは、多種多様の植物が利用価値のある資源としてブリテン島に流入したという歴史的事実と相補関係にある。文字文化が発達し活字となり流通する中で、植物はブリテン島で育ち、またブリテン島に持ちこまれ、それらの木々や花々や果実は様々に描かれ、文字になって植物の表象として定着していった。文字表現による文化資源として、自然を認識する枠組みとして、文学における緑の表象は歴史的伝統として理解されてきた。そして、文学に描き込まれた木々や花々、果実や庭、森林の眺め、食卓の野菜など、様々な植物の表現にはその表現を生み出す理由が背景にあることに気づく。食用であり資材であり美を与えるものである植物には、常に欲望がまわりついていることにも、である。そしてイギリス文学における自然表現の変化にはその変化を生み出す社会的、経済的背景がそこから考察できるだろう。このように考えれば、イギリス文学における植物表象を、植物資源への欲求という文脈から解き明かすことも可能となるだろう。文学に現れた植物表象を、資源としての草花・森などの緑の価値と連絡する文化・社会的構築物ととらえるわけである。

しかし、このテーマが、イギリス文学という学問分野における研究となりうるのか、なりうるとすればどのような意義と困難があるのかということは、考えておかなければ

ならない。本草学から博物学、そして植物学へと、植物をめぐる文字による情報は古くから多く残されている。それらの文字情報を文学研究に生かすことは、文学研究に学際的な彩りを添えて新規性を出そうとすることとも解釈できる。しかし、近代以降の植物に関連する膨大な書誌—英語のものだけを考えても—から知ることのできる、植物に関する知識の多層的な他分野への連絡や文化的表象形成のダイナミズムを想起すれば、そのダイナミズムが持つ歴史性を、近代から19世紀にかけてのイギリス文学作品と対応させる作業が必要となるだろう。このようなアプローチを取る時、単に文学研究に学際性という名の目新しい話題を添える、といったことにとどまらないのは明白である。

そしてこれ以上に考えなければならないのは、園芸や薬草学の知識、科学上の学問としての植物学やその広義の知的営みである博物学的関心を、イギリス文学作品に如何に読み込むかということである。例えば、18世紀の詩作品を少し考えてみたい。当時は名の知られた詩人であったギルバート・ウェスト (Gilbert West, 1703-1756) の詩に、草木の名や果実が言及されている場合、詩とそれらの植物にある背景—生育地から当時の分布や園芸上の利用、文化的指標となりえたかなど—をどのように捉えればよいのか²。テキスト読解に主眼を置くのであれば、詩作品に登場する用語の説明として、それらの背景が注釈として登場するだろう。しかし

詩に現れた植物への関心を植物に関する情報として読み直した場合、それは詩の読解というよりも博物学史の一つの文献資料といった趣を呈することになる。そのように読むと、ウエストと他の18世紀詩人たち、たとえばアレクサンダー・ポープ(Alexander Pope, 1688-1744)との交流も、サミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson, 1709-1784)の『詩人伝』(*Lives of the Most Eminent English Poets*, 1779-81)におけるウエストへの言及も、関心の中心ではなくなるだろう。現在のイギリス文学研究でほとんど取り上げられないことがないウエストのような詩人の詩作品の、背景にある園芸や植物への関心を掘り起こすことにどのような意義があるのか考えるとき、そこには文学研究における学際的かつ歴史的現在性に主眼を置いたアプローチの持つ問題点と同時に、イギリス文学の成立にまつわる問題点とが見えてくる。

現代においてイギリス文学史に登場する作品群は、すでに指摘されるように、内的な歴史的因果関係を持つものではなく、現在までのある時点で読むべき重要な作品、すなわちキャノン(canon)として定着した作品群を時系列に並べているに過ぎない³。20世紀への変わり目に高等教育機関における学問分野としてイギリス文学研究が制度化していったが、この学問分野の対象とする作品群は、それぞれの作品が相互に内的発展性を持つようなものではない。つまり、イギリス文学史そのものには非歴史性が潜在的に存在するといえるのである⁴。例えば先にあげたウエストで考えれば、彼の作品や伝記は知られており、交友関係も知られているが、彼の作品群が文学キャノンとして取り扱われることはほとんどない。また、経済や政治などのより大きな社会的出来事の因果関係において、彼を考察する—すなわちウエストという人物を歴史化する—ことはおそらくほとんど行われていない。それは文学研究を作品研究、つまりテキストへのアプローチを中心としたものと捉える限り、一人の詩人の一つの関心事などは伝記的事項にまぎれてしまうか、作品とは直接関係のないものとし

て理解されてしまいがちであるからだ。政治や経済などのより大きな社会的変化の一つに、植物の移入と園芸における利用、大土地所有者による文化的指標としての庭づくりというテーマを見出す時、ウエストの庭や植物への関心にも、単にストウ庭園を造ったコバム卿の甥であったということ以上の意味合いが見いだされないとも限らない。しかし、それがイギリス文学という範疇で行われる研究である限り、文学作品との関係が重視されるであろうし、その文学作品がかろうじて文学史の中には位置を与えられていたとしても、時代の多様な出来事の中における歴史性を持つものとしては捉えられていない。ウエストの詩から庭園史の何かを掬いとることができたとしても、その知見が行かされる筋道は文学研究の中では現在のところ少ないと言わざるをえない。

本草学から植物学、博物学を経て展開する植物を中心とした自然への知的関心の営為、また有益な植物について旅行記や種々の報告書に様々な形で描かれた記録—これらはイギリス文学の研究との関連において体系的に取り上げられることはほとんどなかった。また、時代を越えて展開する思想史的バックボーンを持つものとしては把握されてこなかった。歴史的に展開する事象を研究対象に組み込むことに置いて、イギリス文学は積極的でなかったといえる⁵。イギリス文学研究において植物表象の形成を問題とすることの重要性はなにか、次にはこの点について整理したい。

2. 近代イギリス文学における植物表象の考察意義

先にも述べたように、イギリス近代の文学作品には、草花や木などの個々の植物や草原や森林などを含む自然の眺めが間断なく描かれてきた。草花や木々などを通して形成される緑の表象は、ジョン・ミルトン(John Milton, 1608–1674)の『楽園喪失』(*Paradise Lost*, 1667)の「神々の花々」(“Ambrosial Flowers,” Book 2, 1.245)から、ワーズワスの描く草原の眺めまで(Cf. *The Prelude*, Book1)、文学作品の重要な要素でありつづけ

たと言って過言ではない。文学作品がそれを生み出した社会と密接に関係するように、植物を源泉とした文学表現の歴史は、当然ながら人が植物に対していかなる情念や連想を抱いたかということと密接な関係を持っている。しかしそれ以上におそらく重要なのは、植物に対してどのような行動をとったか、またどのような価値観のあるものとして植物を手に入れ、生産し、改良し、加工したか—自然の状態を人間の力がいかに馴致したか—ということが、植物表象の歴史的発展には強く関与しているという点である。

文字によって植物が描かれるとき、それは文学伝統のなかで受け継がれた定式的な表現による場合もあれば、客観的な観察を基に新しい表現様式とともに出現する場合もある。18世紀の詩群は、ギリシャ・ラテンの詩歌のモデルが俗語化した趣があるが、次第に緑の風景に対する感受性が深まるとともに自然を描く地誌的な詩として定着した。植物学が自然科学としての厳密さを獲得し始めると、実際に自然の中で観察されるものを客観的に表現しようとする傾向が強まったと考えられる。また、植物表象は視覚情報としても人々の生活を彩った。17世紀のいわゆる「オランダ黄金時代」(Dutch Golden Age) には、花瓶に生けられた色とりどりの花々や机に置かれた木の実などが静物画として様々に描かれ、それらの絵画は居宅を飾った。所有する地所の「肖像画」としての風景画も描かれるようになった。18世紀の後半には生活の中で花と緑を楽しむ園芸が上流階級以外の社会層にも広がるにつれて、植物表象は日常的な風景の描写の中にも登場するようになった。植物学の発展と並行して、植物に関する知識が集積され、図版などの視覚的情報も増大し、一方で個々の植物に関する細密な情報も肥大化していった。

どのような形態であれ、植物表象の出現にはその背景に何らかの歴史的、社会的コンテキストがあり、それはモノとしての植物と人間との関係の実態と照応したものである。ミルトンの「神々の花々」は遠くオリエントやア

フリカから伝承した色鮮やかな花や果実をその記憶の源として持ち、ワーズワスの描く草原は広大なコモンズ(共有地)であったクアントック(Quantock)の丘陵、もしくは湖水地方の自然がその気分的背景にあると推測できる。

植物表象が時代とともにどのような役割を文字文化の中で果たしたかと考えれば、イギリス文学の表現可能性を広げたことは確かなことであり、その逆では決していない。文字表現が対象としうる植物とそれらの植物の様々な様態は、時代とともにその種類を増大させたのであり、植物への関心は多様化し、出版文化にも大きな影響を与えた。17世紀の文学において、聖書の楽園イメージに満ちた花々や果物が多く表現されたのは、宗教的含意が文学作品に強く表れる時代であったためであるが、別な視点から見れば、自生の鮮やかな花々や果実に乏しいイギリスの風土が生んだ美と豊饒を目指す意欲の産物とも考えられる。古くは中近東から、アフリカ西海岸、カリブや南アメリカ、北アメリカ植民地、そしてその後はアジア地域へと、イギリスの植民地的関心は広がっていったが、地理的な意識の射程が拡大することで、それらの地域に生育する食用から観賞用まで様々な植物への関心は当然ながら増大した。大洋を渡る交易船が人と物資の移動を促進し、それと同時に様々な植物がブリテン島に持ち込まれた。ここには、海洋進出を目論むイギリスという国家が、食糧や生活を彩る様々な資材となる植物資源を、着々と取り込んでいく姿がある。氷河期を経て緑の生態系の多くを失った経緯のあるブリテン島一帯は、もともと緑の豊かな所とはいえない。海洋進出の意欲を支える背景には、イギリスの国家的要請としての植物資源への欲求があったと考えて間違いはない。緑なすく庭>としてのイングランドは、世界中の美しく有用な植物を奪取し、懐に囲い込んだ島でもあったのである。

さて、種や苗としての植物や、写生画や旅行記の記事に現れる草木、もしくは果実や花々に対して、人々

がどのように関心を持ったか、また植物に関する情報がどのような経緯で本草学や植物学の知識として集積したかを考えることは、イギリス文学における植物表象を歴史的に読み解こうとすることと確かにつながっている。しかし同時に、そのような考察が現代のイギリス文学研究にとってどのような意義を持つのかについては、十分に考えられてきたとは言い難く、立ち止まって考えてみる必要があるだろう。たとえば、数え切れないほど量産された旅行記の数々に描かれた植物資源の現状と、詩に描かれた珍しい草花とをどのように連絡をつければよいのかを考えた時、イギリス文学研究として適切な方法論は何なのか俄かには結論が出ないだろう。植物に関連するテキストや事実、植物学の知見などは、長い間文学とは異なる文化体系の中の、いわば「異なるディスコースの束」と見なされてきた。それは植物研究史であり、書物史であり、植民地開拓史であり博物学であり科学史の一部であった。それらを取り上げることは、20世紀のイギリス文学研究のディスコースを強く彩ったフォルマリズムの中では、文学テキストからの逸脱と捉えられてもおかしくはなかった。こうした植物に関する情報が含まれるテキストの中には、百年、二百年経ったあとでは、読む価値もないと考えられたものも多く含まれている、この「異なるディスコースの束」は、書かれたものの総体を捉えた場合、それ自体一つの思想史を表現したものとしても読みうるものである。しかしそうした史的重要性が認識されたとしても、現在イギリス文学研究ではどのように取り扱うべきなのかという問いにいかにか答えるかは単純ではない。

というのも、これを考えるには19世紀の末からイギリス文学が制度として成立し高等教育の普及とともに確立したという事実を掘り下げる必要があるからである。英文学が歴史的に形成されてきたプロセスにおいて、近代のイギリスで書かれた膨大な書物群が価値づけられ選別されてきた⁶。その選別は時代の価値観や一時代を画した批評家の意見、教育現場における利用価値

など、様々な基準によって行われてきたのであり、現在重要な文学作品とされているものは、必ずしも作家の存命当時著名な作品であるとは限らない。それらの選別された読むべき作品群は、現在に至っても意義を失わない何らかの原理によって選ばれたのではなく、良いものとして、いわば恣意的に選ばれたテキストの集合体である。そうした作品群を時代順に並べたものが、イギリス文学史として成立したということになる。先にも述べたように、当然その文学史の中に含まれる「歴史」は何らかのテーマを基軸とした歴史的因果関係によって関連付けられたものではない⁷。イギリス文学の主要な作品を年代順に並べても、年代の近い文学作品が同時代社会の現象といかに相互に関係しているかについては、当然ながら曖昧模糊としているのが大半である。イギリス文学史は、文学作品の価値づけがなされたあとで、いわば「後付け」として成り立ったものであり、それは、「歴史の一細目であって発展的全体はない」(“an item of history, not an evolutionary totality,” Court, 15) のものなのである。そして個々の作品の相互の連絡が歴史的因果関係によって理解されるものではなく、一方で作品の自律性(autonomy) が尊重されるとき、テキストは歴史的記録でもあるといった要素をすっかり消し去り、非歴史的な文字情報となる。たとえば、19世紀にイギリス文学が学ばれるようになり、トマス・グレイ(Thomas Gray, 1716-1771)の「墓畔の哀歌」(“Elegy Written in a Country Churchyard”) が教室で誰もが読むべき詩となったとき、グレイの詩のスタイルが、18世紀に良く使われたコモン・ブック(common-book) による鍛錬によって古典の名句を咀嚼し、英語に直す試みを通して形成されたスタイルと呼応することは忘れられるのである⁸。つまり、起源が忘れられ、現在における読むべき価値のみが継承される。

植物についての考察を広く含む、18世紀から19世紀にかけてイギリスで発展した博物学的書きものの多くは、20世紀のイギリス文学研究の視野からは抜け落ちてい

る。テキスト読解中心の研究が隆盛となると、テキストから読みうる時代性への視点は、思想的面からは掘り下げられても、博物学的な科学の視点からはアプローチされることはほとんどなかった。この状況には、いわゆる人文的知と自然科学的知のあり方が知識人のあいだで二分されていることへの警鐘として、C.P.スノーが唱えた「二つの文化」の問題が絡んでいることは明白である⁹。人文学的知と自然科学的知は、それらの専門家養成のプロセスで決定的な教養の質の違いがあり、相互に理解し合えないというわけである。また、文学研究において、博物学的書物を取り上げないことに加えて科学的な考察や論文をほとんど勘案しない傾向は、19世紀の時代から、イギリス文学を読むことがリテラシーの向上の教育目的と結びついていたことから、早くから明白であった。

イギリス文学が一つの学問となり、文学作品が学問対象となっていくプロセスについては、英米での状況が大きく異なるうえに、教育機関によって取り組み方が多様であり、特定の視点や時期を指定できない曖昧なものであることは、すでに定説になっている¹⁰。とはいえ、イギリス文学の成立を思想的に位置づけた一人として、マシュー・アーノルド(Matthew Arnold, 1822-1888)は現在でも重要視されている。本稿では続いて、いわゆるアーノルド的教養主義について、歴史的な相対化とともにその概要を紹介する。イギリス文学の成立には、教育現場での要請が強く働いていることはすでに多く指摘されているが、アーノルドの文芸批評論とどのような関係があるのか、考えていきたい。

3. アーノルド的教養主義とイギリス文学

マシュー・アーノルドが提示した人文主義による人倫の陶冶の理念や、知的・倫理的活動としての文芸批評の推進が、その後のイギリス文学研究に多大な影響を与えたことはすでに多く指摘されるところである¹¹。彼が提示したいわゆるアーノルド的ヒューマンズムは、20世

紀になってイギリス文学が高等教育のカリキュラムに取り入れられるのと並行して、人文教育の要諦となった。この点についてバジル・ウィリーは次のように要約している。

確かに、アーノルドにおいて、我々は人間生活における重大な事項に自由に降り立つ「文学的」知性という新しい現象に出会うのである。彼は、文字文化が与えることが出来る心と精神の質と、そして彼が射程を広げたことで計り知れないほど文芸批評が得たものが、現代社会にとって重要であることを理解し宣言した最初の人なのである¹²。

Indeed, in Arnold we encounter a new phenomenon, the 'literary' intelligence playing freely upon the great concerns of human life. He was the first to see and to proclaim the importance, for the modern world, of the qualities of mind and spirit which literary culture can give, and literary criticism has gained immensely from his expansion of its scope. (Willey, 252)

ウィリーのこの文章が最初に出版されたのは1949年である。アーノルドが示した「文学的」知性を肯定する論調からは、文芸批評の可能性を最大限に拡大することへの信頼が読みとれるが、同時にこの時代は人文知と科学知の融合がまだ現実的なものと感じられていたことも暗に示している¹³。そしてこの時期には、高等教育の機会が広がるのと並行して英語による文学の学習と研究が英米の大学カリキュラムの中に確立していた。アーノルドの影響は、英米の人文教育や英米文学研究に強く働いた。

しかしここで考えたいのは、20世紀の人文教育において受け入れられたアーノルド的教養の理念は、それ自体歴史性を消去された抽象的なものではなかったかという点である。アーノルドの数多くの論考を、ここで詳

細に検討することは本稿の域を超えるが、彼が行ったのは、第一義に国民教育が十分に整備されていなかったヴィクトリア期当時の人々に向かって、国民の教養教育の在り方についての指針を示すことであった。アーノルドの人文主義の主張は、すでに19世紀なるまでに浸透していた、文字を読み、文字を書くことによる学びの形をバックボーンとしたものである。しかし彼は、国民教育の要諦として、俗語(英語)のリテラシーを問題とするにとどまらず、良い作品を読むことを通して精神性を高めることを唱導した。

アーノルドは詩人であり批評家であったが、彼が詩作をしたのは30代までであり、評論や批評活動がそのあとに続く。アーノルドの人生を考える際に重要なことは、29歳の時から35年間、学校の視察官(school inspector)として勤めたということだろう。彼はイギリスの各地を巡り、学事に関わる様々な業務をこなし、報告書を書いた。彼の唱える人文主義や教養(Culture)は、文芸に親しむだけのいわゆるディレタントな文字の上の知識から湧いて出たものではなく、実際に学ぶ子どもたちを見ていた経験に裏打ちされたものである。アーノルドが視察官を始めた1850年代、イギリスには公教育の制度はまだ発達していなかった。彼が最初に担当したのは全国に散在する非国教会徒の運営する学校であった。イギリスの各地にあるそれらの学校で、アーノルドは規律のない学校や学校に文句を言う親たち、物事に対する尊敬の念を持たず怠けることしかしない子どもたちを目にしていた¹⁴。人口が増大する中で十分に学ぶことのできない子どもたちの現状を具体的な政策で改良していこうとすること、これはその後様々な人々が様々なに取り組んだことである。アーノルドが語ることを選んだのは、具体策というより理念である。後に『教養と無秩序』(Culture and Anarchy, 1869)で「教養」(Culture)について多くを語るとき、彼は個々の人がどのような社会階層や生活環境中に置かれているのかといったことは不問に付し、良いものに向かおうとする一人一人の心に

彼は焦点を合わせている。次はその典型的な部分である。

教養を正しく述べるとすれば、その根源に好奇心があるというよりは、完全なものへの愛があるということなのである。それは完全というものを学ぶことなのだ。教養は単にもしくは第一義的に純粋な知識への科学的情熱によって進展するものというだけではなく、良いことをするという道義的社会的情熱によっても深まるのである。

Culture is then properly described not as having its origin in curiosity, but as having its origin in the love of perfection; it is *a study of perfection*. It moves by the force, not merely or primarily of the scientific passion for pure knowledge, but also of the moral and social passion for doing good.

(Culture and Anarchy, 8)

ここでいう「教養」とは、具体的な個々の技能や鍛錬ではない。社会階層と密接に関係する職能に関する事でもない。アーノルドにとって教養は精神性の問題であり、個人主義に基づいた人倫の向上のプログラムを示すものであった。その文脈において、彼は文学作品を通して感情と道徳性を鍛錬することを重要視した。とはいえそこで高等教育における文学研究だけが前提となっていたのではない。「創造的な力、自由で創造的な活動は、人間の真の能力であるということは否定できない」(“It is undeniable that the exercise of a creative power, that a free creative activity, is the true function of man.” From “Function of Criticism at the Present Time,” *Essays in Criticism* 4)と、詩人の創作力に高い評価を置くアーノルドの主眼は、人間の能力の可能性である。その例として、人々が学ぶべきものの手本である「詩人の能力」という抽象的概念を提示しているのである。

そのような手本は、詩を読むことで触れることができ

るものであった。個々の環境でどのような書籍が入手可能であったかはさておき、詩的な感動は、すべての子どもたちに開かれてあるべきものであった。しかし現実には、例えばワーズワスの詩を読み観賞するだけのリテラシーを備えた学童が、公教育の機会が不平等にしか与えられていない国で国民全体のどの程度存在したか、といえ、現代の状況をはるかに下回っていたのは明らかである。アーノルド自身の報告によれば、初等教育の学童の半数以上が読むことに困難を感じないとみなされているとしても、実際に読むことで思考をする訓練が身につけている学童はほとんどいない状況であった¹⁵。暗記や表面だけの字面を追うのではなく、知性を働かせて読む、つまり読むことに喜びを感じる必要がある、とアーノルドは考えた。貧しい労働者の家庭の学童は、十分な書籍を与えられず、文字を使いこなすに至らない場合もあったと考えられるが、彼が示す国民教育のプログラムによれば、よりよく書かれた詩を理解しその詩の意味を深く感じることは、子どもたちに教育を与え社会の良一員として自立させるため、知性を働かせる鍛錬だと考えられたのである。文学を学ぶことで心を豊かにすることは、国民のリテラシー向上のみならず知的活動の基盤としての心の十分な働きをもたらす—これはアーノルドの人文主義の基本のひとつと言ってよい。

彼はまた次のようにも述べている。

刑務所においては、犯罪者の矯正のほかに社会を保護するという国の関心事がある、ということと言えるだろう。我々は、そうだ、学校に於いて読み書きや算数を奨励するほかに、国の関心事がある、と言うだろう。「社会を保護する」ということである。学校が学童たちを街の通りから遠ざけ、学童たちに一頭の遅い子も頭の良い子も一秩序のある、良識を備えた人間の振る舞いを教える限り、またその子供たちが自分の住む場所の周りの環境を開化

する限りにおいて、国は学校に関心があるものなのだ。

...in prisons, it will be said, the State has another interest besides the reformation of the criminal—the protection of society. We answer: And so, too, in schools the State has another interest besides the encouragement of reading, writing, and arithmetic—the *protection of society*. It has an interest in them so far as they keep children out of the streets, so far as they teach them—the dull as well as the clever—an orderly, decent, and human behavior, so far as they civilize the neighbourhood where they are placed.

(“The Twice Revised Code,” 356)

初等教育を受ける学童たちが毎日を過ごす学校が、刑務所と対比して述べられているところ、19世紀中葉のイギリスにおいて、増大する人口の大半をしめていた社会の中下層の人々の秩序をどのように保つか、また社会の道徳性をどのように向上させるかが喫緊の課題であったことを思い出してもよいだろう。子どもたちは読み書きを習い社会の良一員として世に出るべきだとアーノルドは語るが、それは個人の精神の鍛錬に基づいた社会改良の主張でもあった。アーノルドの教育論は、その文芸論や社会評論に比べて読まれることが少ない。しかし、一見して歴史を超越したように見える彼の文芸評論も、イギリスの社会における教育状況を背景に持っているのである。イギリスの文学を読み批評的思考をおこなう時には、利害関心を離れた態度を持つべきである、とアーノルドは考えた。そして彼はその批評する行為を、政治や宗教が関係する事項においても同様にを行うことを称揚した。批評とは、「この世界に於いて、最も優れたものとして知られ、考えられたものを学びそして広める、私心のない努力という考え」(“the idea of a disinterested endeavour to learn and propagate

the best that is known and thought in the world,” *Essays in Criticism*, 37) によって行われるものであるからだ。何かの社会的事項を考察するにあたって、我が身の利益や名誉などを勘定に入れるような考え方をせず、善し悪しを良く知り客観的に分析考察することが必要だというのである。

アーノルドの文芸批評の考え方や人文主義の理念は、20世紀になってイギリス文学研究を牽引した多くの研究者の仕事の中にその影響のあとがある¹⁶。しかしそのときすでに、アーノルドが見たイギリスの地方の貧しい学童たちの学びの姿は、忘れられていたはずである。アーノルドは理念を提示したが、文学研究のカリキュラムは提示しなかった。19世紀の中葉から、大学が次々と設立される中、イギリス文学を学ぶ学科でのスキルや知識をどのように決めカリキュラムを作るか、それはそれぞれの教育機関で努力することとして残された¹⁷。その後様々な議論とともに、オックスフォード大学に英文科が設置され、イギリス文学研究が高等教育機関のカリキュラムとして展開し始めた頃、アーノルドは重要な批評家であったが、彼の教育論は文学部のカリキュラムの中に居場所はなかったはずである。アーノルドの文芸批評論と、労働者階級の学童の学びの風景との連絡を考える姿勢は、イギリス文学研究から消却されたのである。

4. イギリス文学の成立と植物学・博物学的関心

イギリス文学の成立には、教育現場での要請が強く働いていることはすでに多く指摘されているが、これまで考察したように、アーノルドの文芸批評論にも当時の教育状況が背景としてあることを読みとることができる。本を読み文字を書くことは自己教育の最も普遍的な形の一つであるが、何を読むかということは、時代によっても、また読者がどういった社会階層やグループに属するかといったことで異なることは当然であろう。とはいえ一般的には、読むものとして選ばれたのは、その時

代においてすぐれた作品と考えられたものであった。もしくは、その時代のある特定の集団にとって、すぐれていると考えられた—もしくは想像された—ものであった。

イギリスで書かれた文学作品が、「イギリス文学」として意識され編集されていくプロセスが明確になるのは、18世紀になってからである。読むべきもの—キャンノンとして(*canon*)文学作品が選ばれていく経過を経て、「イギリス文学」が成立するわけであるが、アーノルドの文芸批評がそういった歴史的事実の上に成り立っているものであることは意識しておくべきであろう。つまり、20世紀のイギリス文学研究が精鋭化していくプロセスに影響を与えたアーノルド的教養主義をさかのぼっていくと、18世紀にたどりつくわけである。ただし後述するように、18世紀の詩歌のアンソロジーを取ってみても、選択の視点は複数であり、また選択の基準も原理的というより恣意的である。その時代には高等教育における文学研究はまだ制度的に確立していない。先にも述べたように、制度としてのイギリス文学の起源は、曖昧で輪郭のないものである。そしてまた、教育カリキュラムにイギリス文学が組み入れられていくとき、個々の教育現場やそこにいる教員の状況に強く依存した状態だったことも事実である¹⁸。

20世紀初頭には、イギリス文学研究において学ぶべき作品は、大学における教育が制度化した新しい時代にふさわしいものとして整えられていこうとしていた。また、学問分野の一つとして、文学研究ではテキストに対する厳密性を求める専門性が深められた。たとえば小説が文学ジャンルとして研究されるようになり、詩作品の選別においてもT.S.エリオット(T.S. Eliot, 1888-1965)の批評によって形而上学詩人たちがキャンノンの仲間入りをした。このように文学研究のインフラが整えられていくのは、イギリス文学研究が、大学進学者の増加に伴って、大学における一つの学問分野でありカリキュラムをもつ学科となっていたことと並行した出来事である。

このような中で、18世紀に盛んに書かれた博物学的関心に基づく旅行記や、自然観察、博物誌の読み物などは、文学のカテゴリーとして取り上げられないのが常であった。詩か小説、もしくは精華としてのシェイクスピアというのがイギリス文学であり、この傾向は現代でも明確に続いている。

しかしイギリス文学という研究分野のカテゴリーが現代のように成立しておらず、自然科学の分野が細分化していない18世紀においては事情が異なっていたはずである。当時、文学作品にも植物学や博物学などの科学的関心が現れていたとしても決して不思議ではない。18世紀、「文学」(belle-letters/literature)のなかで上位にあったものは詩である。それが古典的な考え方であったとしても、叙事詩は詩として最も尊敬されるべき表現の形であったであろうし、小説は詩よりもすぐれた文学ジャンルであるとは考えられていなかった。読書を楽しむ余裕のある人々の目からすれば、文学のジャンルには一定のハイレベルがあったのである。この考えで行くと、地所を持ち農業経営をした社会階層の人々がまずは関心を持ったと考えられる園芸書や植物辞典に書かれているような知識は、文学とは無縁なのかという疑問が浮かぶが、そのような知識はむしろ文学の表現の中に拡散し見えない形になっているのではないかと推測できる。文学作品は、植物についての具体的情報ではなく、文化的に有意であるものに反応し、そのエッセンスを吸い上げる、ということでもあるだろう。また、造園に関心のあった、ウエストやウィリアム・シェンストーン(William Shenstone, 1714-1763)などの詩には造園への関心が直接的に読み取れる¹⁹。

ギリシャ語やラテン語の古典の代わりに、英語で書かれた最良の「文学」を読むことで身に付けた教養が紳士のものであると考えられたとすれば、園芸や植物学の関連の実用書は「文学」とは考えられなかったはずである。しかし18世紀には、庭を描き自然の風景を描写する詩が次々と書かれるようになった。また、この

時代は博物学的関心が高まった時代であり、地質学から動植物など自然に目にするものに対する科学的関心が様々な著作を生み出した時代でもある。王立協会のメンバーの著作を少し考えてみても、17世紀後半から多くの重要な著作が発表されており、それらの著作は現代の目からすればどの程度科学的客観的観察に基づいているかは検討が必要であるとはいえ、読み物として重要性が低いものではない。たとえば、王立協会会長も務め、医師であったハンス・スローン(Hans Sloane, 1660- 1753)は、17世紀後半、新しくイギリス領となったジャマイカでの植物や生物の観察を行い、後年それを書物にして出版した(*A Voyage to the Islands Madera, Barbados, Nieves, S. Christophers, and Jamaica*, 1707-25)。これは、資源としての植物を求めることと、科学研究と旅行記が一体となったものである。フランス王の命を受けて行なわれた植物学者のトゥルヌフォール(Joseph Pitton de Tournefort, 1656 -1708)によるレヴァント地方(東部地中海周辺)での植物観察の旅と記録は、1717年に旅行記(*Relation d'un voyage du Levant*)として出版され、翌年にはすぐ英訳本が出るほど良く読まれた²⁰。フランスでは1749年からビュフォンの『博物誌』(*L'Histoire Naturelle*)の出版が開始され、イギリスでも1760年代から部分的に紹介が始まった。その他、博物学的関心が反映された書物には数多くのものがあるが、たとえばギルバート・ホワイトの『セルヴォーンの博物誌』(*The Natural History of Selborne*, 1789)のような、今日まで読み継がれているものもある。旅行記や日記やジャーナリズムにおける様々な記事にも博物学的関心が見られるものもあるが、それらの多くは時代を経て読まれることなく忘れられていった。日常的な経験に基づいた自然への関心は、博物学的な自然を網羅的に見る姿勢から、細分化された学問領域における関心へと移行していったと考えられるが、それらの関心の一定の側面は、詩歌などの文学に掬いあげられたともいえる。

20世紀以降のイギリス文学においては、文学作品は詩や小説、戯曲などジャンルに分けて考察することが一般的に行われている。これはそれぞれのジャンルに応じた批評理論や分析手法の発達も関係している。文学作品をジャンルに分けて考察することは、文学研究の手法としては合理的であるかもしれない。しかし書物を楽しむという視点から見れば、何を読むかの選別の基準はジャンルによるとは決して限らない。植物への関心という点から見れば、一つのジャンルで表現されたことが、他のジャンルでも敷衍されて表現されることはしばしば起こることである。詩の形で表現されたものと内容的に共鳴する散文的作品、散文による文字情報を発見することは、多くの場合可能だろう。そうした歴史的資料ともいべき文字情報をどのように処理するかについては、後述する新・歴史主義における問題点と重なるが、ここではまず、18世紀の詩作品のアンソロジーを通して、その背景にある文学ジャンルにこだわらない、散文的、もしくは博物学的関心の在り様を考察したい。

5. 18世紀のアンソロジー

18世紀を通して様々なアンソロジーの編纂と出版が行われ、文学を親しむ人々のすそ野を広げた。文学作品や詩人たちについての記録を残す、という意味においても、アンソロジーは有益であった²¹。18世紀の読者は、一つのアンソロジーに収録された詩群を一つの詩一つまり、様々な主題が次々と連続的に繰り出される詩的世界として楽しんだ。そのような詩群には、詩を読む教養を共有する人々の気分や趣味が反映されていた。一つの詩には一つの詩的全体がある、というより、一つの詩は主題ごとの断片に分けられて楽しめることが多かった。家人の誰かが読み上げる詩の断片を耳で聞くこと、仕事の合間の時間に読める短い文章を切れ切れに楽しむなどの、「読む」形態はむしろ常態であったという²²。そのような読書において、詩人の個性や主義主張はとくに重要視されないだろう。読む側の趣

味や都合によって様々な作品は並べ替えられ、断片化されるのである。短い詩、もしくは長編詩の部分を集めた詩のアンソロジーは当時の人々の読書習慣に適合したものであった。サミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson, 1709-1784)の『詩人伝』(*The Lives of the Poets*, 1779-81)は、客観的な事実を押さえた近代的な詩人伝として重要であるが、エポック・メイキングともいえるこの詩人伝の出版の背景には、詩を読む読者層の広がりや、それを支えた多くの出版業者たちの文学作品の出版活動があった。

出版業者であり編集者でもあったロバート・ドズリー(Robert Dodsley, 1704-1764)による詩選集(*A Collection of Poems by Several Hands*)は、18世紀の代表的なアンソロジーである²³。1748年に出版が始まり、その後多くの詩作品が付け加わり最終的には6巻本となった。ドズリーが亡くなってからも、18世紀を通じて再版され、人気のあるものであった。この詩集は、同時代に活躍した詩人や、すでに物故して忘れられようとしている詩人たちの作品を網羅している。18世紀に書かれた詩が中心であり、その意味でこの詩集は同時代詩集といえる。詩のタイトルを並べた目次が巻末についており、作者別のアンソロジーの体裁をとっていない。一人の詩人のいくつかの詩が続いて採録され、当時名前のあった多くの詩人が取り上げられている。上流階級の文芸サークルとの関連が読みとれるものや、ギリシャ・ローマの古典作品を意識したものも目につく。オード(ode)や哀歌(elegy)など、抒情詩への傾倒が強いのも特徴である。

このような詩選集には、読み進むに従って当時の庭園造りや庭に植えられた草花を言及する個所に出会うことがある。詩を楽しむ余暇のある人々は、何らかの形で庭園を楽しむ余裕もあることも背景にあるだろう。もしくは、庭ではなくとも、自然への関心は、さりげない形で様々な詩行に浸透している。例えば、イギリス国教会の牧師であり、この詩選集にもいくつか採録されているジ

ジョン・ドルトン(John Dalton, 1709-1763) の詩「建築と造園についてのいくつかの考え—ラウザーホールのジェームス・ラウザー卿へ」(“Some Thoughts on Building and Planting, to Sir James Lowther, Bart. Of Lowther-Hall,” vol.1) がある。この詩はジェームス・ラウザー(Sir James Lowther, 1673-1755) の邸宅であるイギリス北西部、現在のカンブリア地方であるウェストモアランド(Westmoreland) にあるラウザー・ホール(Lowther Hall) とそれを取り巻く地所に広がる自然の造形を主題にしたものである。後半では、「自然の呼びかけによってすべての事物は現れる／そしてすべてに美しさを与えるのは有用さということなのだ」(“All forms arise at nature’s call,/ And use can beauty give to all,” p.67) という、テーゼが示される。自然は人間の手によって整序されることで美しくなるのである。自然が美を与えるにせよ生産物を産出するにせよ、それが人間にとって有用でなければ完璧にはならないのだ。自然を人間の力によって馴致し囲い込むことは美しさへの道なのである。これは18世紀の風景庭園の背景にある自然への思想として一般的なものであろう²⁴。続く詩行で詩人が語るのは、地所にいきわたった自然を管理する目であり、世話の必要な、若い、もしくは寒さに弱い植物(“tender plants”)への視線は、風景を構図でとらえるよりも風景の中にある植物に焦点を当て、その性質を語ることに特徴がある。

自然のままこうなったかと思いがうように
木々は甘美にも野趣にあふれて散らばっている。
しかしすべてが正しい土壌と場所にあるのだから、
木々も疑いなく喜んでいるのだ。
谷間にある世話のかかる植物は安息している、
やわらかい春風だけが吹くところに。
荒涼とした丘陵はモミの木に防備され、

その庇護のもと穀物は晴れやかである。

So sweetly wild his [Lowther’s] woods are strown,
Nature mistakes them for her own,
Yet all to proper soil and site
So suited, doubly they delight.
While tender plants in vales repose,
Where the mild zephyr only blows,
Embattled firs bleak hills adorn,
Under whose safeguard smiles the corn. (Vol.1. 67)

この詩は読者にラウザー・ホールを紹介しているものでもあり、その意味で一種の訪問記のような体裁でもあるが、自然が人間の暮らしに合うように整備されるべきであるという教訓的内容と同時に、視界に入る植物の生育の様子とその役目についてさりげなく示唆しているところ、一種博物学的な視点も交錯しているといえるだろう。ここでは、ロマン主義詩によく見られる、自然現象が人間の心の隠喩となるという視点はない。人間は自然を知り自然の有用性を引き出すのであるが、その自然は客体でありながらあくまでも人間の心に親しい、とでも言うべきであろうか。当時の読者はこのような詩行を通して、自然を眺める目を養っただろうと考えられる。18世紀の読者は、アンソロジーに収録された詩群を、少しずつ気ままに楽しんだ。長編詩を最初から最後まで全編を読みとおすといった読み方ではなく、部分的に抜粋された詩行を、気分のままに読むのである²⁵。時代やジャンルを超えて、好きなものを読む態度は、常に道草をさそう長い散歩のようなものであった。そうした文学の楽しみ方は、現代のイギリス文学研究の現場からはなかなか見えてこない。

18世紀、とくに後半は、国家の歴史についての意識が深まった時期でもあった。トマス・パーシー(Thomas Percy, 1729-1811) の『英国古謡拾遺集』(*Reliques of Ancient English Poetry*, 1765) の出版や、エドワー

ド・ギボン(Edward Gibbon, 1737-1794) の『ローマ帝国衰亡史』(*The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*, 1776-88)などに示されるように、中世期のブリテン島やローマなどの古代史への関心の深まりとともに、イギリスの国家の起源を様々に探ろうという気運も強くなっていた。1799年、イギリスがフランスとの交戦状態に入ると、そのような古代への関心は国粹的な愛国心とも結びついていく。例えば、ジョン・ボイデル(John Boydel, 1720-1804) のシェイクスピア・ギャラリー(Shakespeare Gallery) の計画など、そのような時代背景と結び付いた典型的な例である。

ジョージ・エリス (George Ellis, 1753-1815) の編纂した近代初期の英詩選集、『近代初期詩人の代表作』(*Specimen of the Early English Poets* 1790初版) もこうした時代的気分と関連しているだろう。この詩選集は、エリザベス朝から17世紀にかけての詩作品を多く収録したものであり、16世紀以降の国王の治世ごとに代表的な詩人とその作品を並べ、英詩の歴史を示すという意図をもって編纂された。ここに見られる歴史観は、国家の精髓は詩に表されるという思想と文明の進歩観が結びついたものと考えられる。詩が時代の精神と呼応すると考えれば、エリスの選集に見られるような、16世紀以来の詩作品を王の治世ごとに列挙することが歴史を語ることになる、という論理は理解できる。

ただし注意したいのは、エリスの編纂した詩集に見られる歴史への関心は、現在で言うところの作品の歴史性というものとは全く異なるという点である。エリスの詩選集に見られるものは、国家の発展という概念によって説明された時代ごとの文学作品の集まりである。これは、国史としてのイギリス文学史であり、繁栄する国家には優れた詩人が輩出するという考えがその背景にあると考えられ、詩の内容や詩が書かれた時代背景から見られる相互の因果関係によって導き出された歴史を提示したものではない。

エリスの詩選集はエリザベス朝の詩人の再評価を促し、19世紀には良く読まれた²⁶。この詩選集のコンセプトには、イギリス文学史が国史ともなりうる、という点が明らかに示されている。当時のイギリスがナポレオン戦争を経て大英帝国へという歩みを進めていたさなかであったことを考えると、愛国的、国粹的な気分と国語による文学としてのイギリス文学概念が結び合わさったものであると考えられる。これが、20世紀になって教育現場で採用され得るイギリス文学史観であったかどうかは疑問が残るが、ブリテン島で16世紀に書かれた詩歌を、たとえば21世紀のイギリス文学研究者が読むとき、そこにどのような歴史を見いだせるのかということを考えるヒントにはなるだろう。古いイギリス文学作品を生み出した遠い昔の歴史的事実を知することは、国家の華としての詩歌の再評価、という文脈といかに関連するか、もしくは相反するか、ということである。

以上、取り上げた二種のアンソロジーは、文学(belle-letter)としての詩作品を集めたもの、すなわちどちらも教養や知識を高めるものとしての詩という視点から編まれたものであった。これとは違って、実践書としての詩選集もあった。詩を声に出して読み、読み書きや弁舌を学ぶために編集されたものである。この種の文芸作品を集めた教科書として、たとえばスコットランドの英語教師であったジョン・ドラムンド(John Drummond) 編の『読むことと反復のための詩選集』(*A Collection of Poems for Reading and Repetition. Selected from the Most Celebrated British Poets*, 1762) がある。18世紀スコットランドでは、イギリス文学を学ぶことへの関心が非常に高まっていた。教育システムにおいてリテラシーの向上を図ることは経済的発展と互助関係にあると考えられた²⁷。『読むことと反復のための詩選集』では、作者の名はほとんど明示されておらず、詩のテキストは全文ではなく部分的な抜粋である。それぞれに「偽善」(Hypocrite)、「自然」(Nature)、「物語する」(Story-telling)、「機知」(Wit) などの短いタイトルが付けられ、

そのタイトルのアルファベット順に並べられている。この詩選集は、教師とともに繰り返して読み、声に出して読み、暗唱するためのものであり、その効果について編者は次のように述べている。

楽しい気持は散文よりも詩によって記憶することがより易しく、詩的に表現された方が人間生活の描写ももっと目を引くものとなる。この[教本での]練習は知識を増やすことで頭を鍛えることになるだろうし、感情を豊かにすることで心を改良するだろう。なぜなら、詩が一つ一つの言葉を気高くし、私たちの言語に、あらゆる機会でする非常に多様な言葉や言い回しをもたらしてくれるのだから、詩は私たちの考えを豊かにし、結果私たちの知識も増やすのである。

As a happy thought is easier remembered in verse than in prose, and descriptions of human life are more striking, when poetically expressed; this practice may tend to enlighten the head, by increasing their knowledge, and mend the heart, by enlarging their sentiments. For, as poetry ennobles every language, and furnishes our tongue with the greatest variety of words and phrases on every occasion, so it increases our ideas, and consequently our knowledge (vi-vii).

スコットランドにおける「イギリス紳士」の教育は、まず英語(標準語)の教育だった。ここでは、詩を声に出して読み、暗唱することが知識の増大につながると述べているが、ここでいう知識とは感情が豊かになることによる心の発達を主眼としている。また、詩に描かれた様々な内容が教育的効果を持つことも含まれているだろう。ジェームス・トムソン(James Thomson) の『自由』(*Liberty*) の抜粋を読んで、古代のブリトン人の王の情景を思い浮かべ(“King of Britain, 56)、アレクサンダー・ポープ(Alexander Pope) の『批評論』(*An Essay on Criticism*)

から真の機知(“Wit”, 129)とは何かを学ぶ、といった具合である。このテキストで学ぶ学生は、トムソンやポープについて学ぶわけではない。テキストに書かれた文字から学ぶことが全てである。

この他の例として、非国教会徒のアカデミーで、先進的な教育カリキュラムで一時代を築いたウォーリントン・アカデミー(Warrington Academy)で用いられたテキストがある²⁸。ここでは、アカデミーの教授であったウィリアム・エンフィールド(William Enfield) 編の『弁舌教本』(*The Speaker*, 1774初版) がテキストとして用いられた。この教本の内容は、詩作品から散文作品(エッセイの類)、および警句などを含むもので、主に読むことと話すこと(弁舌)の訓練のためのものである。『弁舌教本』は、1782年にウォーリントン・アカデミーが解散したあとも、版を重ねたロングセラーであった。学校で用いる教本としてだけでなく、文学作品集としても質の高いものだったからであろう²⁹。聖書からシェイクスピア、フランシス・ベーコンから同時代のクーパーやゴールドスミスなどの詩人まで、人生について教える警句や有名な作品の抜粋をふんだんに盛り込んだ本である。徒然に読むアンソロジーとしても需要があったと考えられる。

これまで取り上げた18世紀のアンソロジーを通して分かることは、詩歌や文学作品のもつ歴史性は、それらの作品が読者の前にテキストとして提示され読まれる際には、その読者が知りうる範囲で把握されるものであり、ことさら掘り下げられるべき主要な要素ではないという点である。先にあげたドズリー編の詩歌集においては、18世紀になってから書かれたものを中心としており、それらの詩作品はおおむね同時代のものと考えられていた。見方を変えれば、ハノーヴァー朝になり責任内閣制となった18世紀前半からの何十年間かを同時代としての同質性を持つものと考えた上で、その時代の作品を収録していると見ることができる。エリス編のエリザベス朝の詩歌集は、王家の歴史とともにカテゴリー化されており、いわば国家の古典としての詩歌であるが、歴代

王の紹介および詩人の短い伝記が添えられたこの詩歌集の体裁は、現代のイギリス文学史に紹介される時代背景の記述と通じるものがある。ただしそれらの時代背景の記述は、その時代を短く物語化したものにとどまっている。その他、読み書きや弁舌の教科書として用いられたイギリス文学の作品は、当然言葉そのものや言葉の使い方に焦点が当てられるため、時代ごとの作品の紹介の必要性は意識されていない。時代性を見つけるとすれば、テキストとしての時代性であり、ウォーリントン・アカデミーの『弁舌教本』には、警句や名言なども多く含まれており、生徒の教養を養う視点がどの点にあったか、時代やそのテキストの使われた環境との関連を推し量ることができる。

このようなアンソロジーが18世紀には隆盛となったことは、18世紀から次第にイギリス文学作品が一般の人々の教養を高めるものであり、リテラシーを得る道具としても使われるようになったことを示している。そしてこのようなアンソロジーの流行は、19世紀以降、イギリス文学が教育現場で使われるようになり、また高等教育機関の学科ともなっていくプロセスの、いわば前哨戦だったといえるだろう。そして、教養を得るための詩歌の観賞も自己研鑽の一つであると考えれば、イギリス文学が学問として成立していくプロセスには、歴史的に見て国民を教育するというその時代ごとの要請が強く働いていると見てよいであろう。そしてその中で、読むべきすぐれた作品としてのキャンノンが、次々と決められていくわけである。そして20世紀になり、キャンノンとなった作品群をイギリス文学史として纏めたとき、時系列の作品群が、例えばノートン社のイギリス文学選集、*The Norton Anthology of English Literature* として編纂されることになる³⁰。これらを考えてみると、イギリス文学を学ぶということは教育ツールとしてのキャンノンとなった作品をまずは与えられるということになるだろう。作品が与えられることが先であり、読むべきものは何であるのかを決めることが喫緊の課題ではなく、まして研究の目的に

はないといった枠組みの中に置かれているわけである。そうした状況で、先に述べた「異なるディスコースの束」について考察しようとしたとしても、そこから歴史的な意識の広がりと深まりを促す研究の視座が生まれることは難しいという印象を持たざるを得ない。

ここまで見てきたところで、最後には20世紀後半、様々な形で提出された歴史主義的な文学研究について考察したい。

6. イギリス文学研究における歴史主義に求められるもの

1980年代から隆盛となった新・歴史主義批評(New Historicism)は様々なアプローチの方法や視点を取り込みながら現在に至っている。マルクス主義批評から新物質主義(New Materialism)まで、新・歴史主義批評が包括し、かつ発展させた批評のアプローチは多岐にわたる³¹。これまで見てきたように、イギリス文学の成立には、歴史的内在性を持たない作品群のまとまりがキャンノンとして提示されるプロセスを伴っているが、そうしたイギリス文学の研究に、少なくとも現在における研究の意義を見出そうとするとき、作品の書かれた時代とその作品との相互関係を読み解き、時代のダイナミズムを作品から掬いあげようとする態度に一定の成果を期待することはできるはずである。ただしこの場合の成果とは、多くの場合文学作品のキャンノンとしての資質やキャンノン形成のプロセスには疑義をはさまず、受け入れることが前提となっている上でのものである。キャンノンと見なされる文学作品には、文学的読み物から辞典類まで様々なものを含む植物表象に絡むディスコースのほとんどが含まれない。ということは、イギリス文学研究の分野では、時代ごとにいかに植物情報が受け継がれ様々なディスコースの中で展開したかという点を重要視する姿勢に意味が見出しにくく、なぜそうであるのかを明らかにするためには、キャンノン形成のプロセスで植物表象に絡むディスコースを除外する際に働く価値判断

について吟味しなければならないだろう。どの作品が優れているかを定める際、それでは何が基準となるのだろうか。

審美的・芸術的価値判断は、対象となるものの美や卓越性などによって自律的に決められるものなのか。美や善や道徳性に関する判断は、哲学的に見れば観念的な議論となるだろうが、実際上の価値判断は、具体的な文脈において対象物が特定されて行われる。対象物が同じであっても、文脈が異なれば判断も異なる可能性があるのであるから、その判断は絶対的なものではない。実際のキャンノン形成においては、どのような物品を流通させ生産・消費することが国家のために利益であるかといったときに働く判断と同質の、経済的視点からの価値判断が背景にあるということがすでに指摘されている³²。ある作品（もしくは作家）が他より優れているという判断がなされ、その判断が持続するためには、何らかの利用価値が担保され続ける必要がある。たとえば道徳的に問題がないと見なされ、文章や内容にすぐれたものがある作品は、文字によって自らの知識やリテラシーを向上させるために多くの人が読むのだ、と考えられる。しかし同時に、そのような価値判断そのものに潜むイデオロギーにかかわるゆがみが問題となる場合もあるだろう。キャンノンの見直しにつながるころである。女性の作家を認めるべきである、労働者階級の作家も読むべきだ、といった議論が起こる³³。そして、どのようにキャンノンとなる作品や作家を変更しようとも、何がその選別基準になるのかといえば、普遍的な判断基準などというものではまったくなく、歴史的な、その時代ごとの、状況と成り行きによって決まるという方が正しい。

但し、ある一定の領域の読み物を継続的に文学的キャンノンからは排除する作用が働く場合もある。科学的読み物の場合である。これは先にも別な視点から言及したトピックであるが、博物学的関心によって書かれた書物の多くが、19世紀に教育制度が整備され、イギリス

文学が学校で教えるものとなる中で、教室で教える作品、つまりキャンノンからは外されることになった。これは学校制度の中では同時に科学教育が進んでいたという点が大きく働いている。学生がいかに効率よく知識を吸収するかを考えた時、最新の科学知識を教授することに主眼が置かれるのは当然である。一方で、文学のテキストとして一世紀前の科学的読み物が採用されるかといえば、たとえそれがどのように作品としてすぐれていたとしても、国民教育全体からみれば効率のよい話ではない。科学的知識は自然科学の学習から学ぶべきであって、文学のカリキュラムからではない。現代の教育においては、博物学は現代科学からみてそぐわない要素を多く含むと考えられたことは確かであって、18世紀の人々が楽しんだように、今は博物学的読み物を楽しむ時代ではなくなって来ている。博物学的読み物は、いわば正当な道筋をたどって文学的なキャンノンとは成り得ないものとなったわけである。背景にあるのは、リテラシー教育と文化資本から成る国家の物的・人的資産を国民教育にどのように振り分けるかが問題だと考えれば、博物学関連の読み物をイギリス文学から排除することには、教育上の効率という経済的な意味で合理性があるわけである。

歴史的、社会的視点から植物表象がいかに形成されてきたかについての背景を後付け、それと文学作品に描かれた植物との関係を考察すること、これは一つの「歴史主義」的アプローチであるが、そのようなアプローチにもこれまでいろいろ問題点が指摘されてきた。特に、新・歴史主義批評として1980年代から展開した一連の研究思潮には、当初から様々な指摘がなされていた。たとえば、1)歴史的な事実の取り上げ方が恣意的である(arbitrariness)、という点、そして、2)取り上げた歴史的事実と文学上の記述との歴史的因果関係(historical causality)が明確に示されていない、といった点である³⁴。これらの点はどちらも文学研究における歴史性の捉え方の質に関わる問題であるが、ある作品

が書かれた時期とその時期の社会状況との対応だけを勘案することが、果たして歴史性を捉えたことになるのかについては考えなければならない。たとえば、M.レビンソン(Marjorie Levinson)がワーズワスの「ティンターン寺院」(“Tintern Abbey” 1798)を論じて、当時この廃墟の周りに住みついていた浮浪者や近隣の小屋の石炭の煙突の煙などの眺めを、ワーズワスがすべて消去して詩にしていることを指摘したとき³⁵、それがワーズワスの詩作における一種の非歴史化、もしくはブルジョア的景観視点の形成を明らかにするものであっても、果たしてこの詩を歴史的文脈においたのかについては大いに留保がいるはずである。18世紀の景観詩の伝統を背景にしてそこから個の内省を大いに展開したこの詩について、時代を見据えた歴史化を図るとすれば、エンクロージャーによる社会構造の変化と浮浪者といった文脈のみならず、ピクチャレスクツアーなどのブルジョア趣味や、フランス革命後の社会的風潮、イギリス経験論からの認識論上の議論まで、さまざまな複合的な歴史的パースペクティブの交差する中心点にこの詩を置く必要が出てくるだろう。文学者に関連する様々な話題、彼らが生きた時代の出来事など、史的な事項はいくらでも取り上げられるが、それを文学研究にどのような意義づけでどのように生かすのかは、常に問題となるところである³⁶。要点となるのは、歴史性をどの基軸から見ようとするかということであろうし、レビンソンの議論が伝統的なワーズワス理解への疑義につながる面があったとしても、それが非歴史的な英文学史を前提とするものであるとするならば、議論そのものに何らかの留保も必要となるとも考えられる。

植物に関する歴史的事項を文学研究において考える場合にはどうなるのだろうか。テキスト中心の研究態度である場合、それはそのテキストのソースをたどる作業となる。しかし、数々のサクラソウ(*primrose*, *Primula vulgaris*)の花が植物事典に記述され、植物学の情報が一般にも流布するようになっていたとして、ワーズワス

が描いた「サクラソウの繁み」(“*primrose tufts*,” in “*Lines Written in Early Spring*,” l. 9) にどの程度影響しているか、などは個々の詩行に関して明確にできるものではない。ワーズワスの使った植物辞典は、植物学の発展と出版史の中で位置付けられなければならないし、それには当時の植物流通や栽培の実際の実際や、植物に関する情報を調査し歴史的に意味づけることが必要になる³⁷。ワーズワスの使った植物辞典を、その辞典の植物学史における位置づけをせずただ詩人が利用したということで重要視する態度は、歴史的な事実であるその植物辞典の発行を、正しく歴史的な文脈において位置付け評価しない、という点において恣意的な歴史的事実の取り扱いになりやすい。文学の研究において歴史的事項を取り込む場合には、文学がコンテキストを与えると考えるのではなく、歴史的事項を積み重ねて何らかのコンテキストが形成されるときになって初めて、文学作品がそのコンテキストのなかでどのように読みうるかが明らかになる。つまり、植物辞典の発展史や、18世紀を通じて発展した園芸の上に、ワーズワスと彼の植物辞典が歴史的因果関係を以て理解できるのであって、そうした歴史的な掘り込みなくしては、ワーズワスの利用した植物辞典に関する話題は、些細な逸話の一つになってしまいかねない。これは、植物表象に対応する文字情報や視覚情報を文学研究に持ち込もうとすると、それらの「文学ではない」情報の取り扱いには歴史的視野に基づいた整理が必要だということである。しかし、イギリス文学研究の分野では、時代毎に区切られた分野別に研究組織が形成されている³⁸。植物情報が時代ごとにいかに展開したかといった、時代横断的なアプローチを重要視する姿勢は、イギリス文学研究ではいわば構造的に消去されている。テキスト中心の文学作品の読解においては、ことさらこの傾向が強まらざるうと考えられる。

文学研究における非歴史性を克服するためには、テキストの読解においても現在とそのテキストが書かれた

時代との距離感を意識することがまずは必要だと思われる。200年前の作家のおかれた物理的、精神的状況のすべてを完全に理解することはできないことは明白であるとしても、少なくとも歴史性についての問題意識をもってアプローチする姿勢は必要である。ここで一例として、イギリス文学研究において重要なひとりである、サミュエル・テイラー・コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1832) の著述をどのように読むかを考えてみたい。コールリッジの全著作の編集、出版が始まったのは1950年代、新批評(New Criticism) から展開した20世紀中盤までのフォルマリズムの批評が優勢であった時期である。まず決定版の書簡の出版が開始され、それと並行して膨大なコールリッジのノートブックや草稿、また本の余白への書き込みであるマージナリアまで、様々に書き遺されたコールリッジの言葉が、丹念に拾い集められて活字になっていった。『コールリッジ全集』(Collected Coleridge, General editor Kathleen Coburn) は次々と発刊された。これらの書籍をすべて並べると、書棚を埋め尽くすほどの巻数になるが、こうした壮大な企画が実現したのは、20世紀中盤までのイギリス文学研究の制度化の中で、フォルマリスト批評の起源とも考えうるコールリッジの言葉を記録することへの強い時代的要請があったためであると考えてよい。

コールリッジという一人の詩人は歴史的存在であるが、同時に彼の残したテキストは現在性を持っている。このことはどのような詩人や作家の場合でも同じであるが、コールリッジの場合、彼が書き残したものと関係する歴史的時点や出来事、社会状況や政治的背景などが極端に多様だという特徴がある。『マージナリア』(Marginalia)を例にとりて考えてみたい。たとえば、ウィリアム・バートラム(William Bartram, 1739-1823)の『旅行記』(Travels through North & South Carolina, Georgia, East & West Florida, ca. 1791)に、コールリッジは次のように書きつけている。

これは正しく言えば旅行記ではない。旅人が観察した事物によって引き出された、描写を中心とした一連の詩だ。これはとても美味な本である。そしてあらゆる美味なものと同様、一度にほんの少しだけにするべきなのだ。ウィリアムとドロシーが外に散歩に出かけた時、この本の序文の一部をきみに読んであげたのは、一年の今ごろの時期だっただろうか。

This is not a Book of Travels, properly speaking; but a series of poems, chiefly descriptive, occasioned by the Objects, which the Traveller observed—It is a *delicious* Book; & like all *delicious* Things, you must take but a *little* of it at a time.—Was it not about this time of the year, that I read to you parts of the “Introduction” of this Book, when William & Dorothy had gone out to walk?

(Marginalia, 1, 227)

コールリッジが「きみ」と読んでいるのは、ワーズワスの義理の妹、セアラ・ハッチンソンである。本の余白に書きつけたこの文章には、コールリッジのセアラへの伝言のような、ワーズワス兄妹が不在の間二人で過ごした時間を秘密裏に記録しているような、プライベートな気分がある。バートラムの『旅行記』が、コールリッジやワーズワスを始め、多くの文学者にインスピレーションを与えたことはよく知られている³⁹。このマージナリアはそうしたインスピレーションに、コールリッジが思いを寄せたセアラの彩りを添えるもの、とまず読むことができる。

このように、文学作品に影響を与えたものとしてバートラムが考察されるという状況が生み出されるわけであるが、しかしながらコールリッジのこの書付はセアラ・ハッチンソンとの対話というだけではなく、バートラムとの対話でもあることを忘れてはいけない。バートラムは当時のアメリカの代表的な植物学者、博物学者であり、クエーカー教徒としてのネットワークから、イギリスの植物

学者とも交流があった。コールリッジがセアラ・ハッチンソンに読み聞かせた部分には、次のような部分も含まれていたかもしれない。バートラムは植物には地上に広がっていく力が備わっていくことを、種が様々な方法で運ばれることを記述する。動物に食べられて糞のなかにまぎれて別な場所に着地することも一つである。そして、次のようにもなる。

小さな種は時々放射状の毛や羽毛を備えていたり、または薄くて軽い皮膜をつけていたりするが、それは羽根の役割を果たすわけで、それに乗って種は上へと舞登り地上を離れ大気の中に浮くのである。そして地上に降り立つまでに、とても遠い地域まで疾風によって運ばれる。また鉤をつけているものもあり、それで横を通り過ぎる動物の羽毛や毛につかまって、遠くへと広がる手段とするのである。

Small seeds are sometimes furnished with rays of hair or down; and others with thin light membranes attached to them, which serve the purpose of wings, on which they mount upward, leaving the earth, float in air, and are carried away by the swift winds to very remote regions before they settle on the earth; some are furnished with hooks, which catch hold of the wool and hair of animals passing by them, and are by that means spread abroad...⁴⁰

バートラムの観察の特徴は、植物の種が描写の主人公であることだろう。種は有用性によって評価されるのではなく、種としての活動を中心に記述されている。このような自然の見方は、自然に人間の心の共鳴を読み取るロマン派の詩に描かれた自然と近い。バートラムの自然への信条の背景にあるクエーカー主義もあるだろうが⁴¹、このような著述が出現するのは、博物学が成熟し、良く書けた読み物、「文学」としての完成度を得た時代にであったからだともいえるだろう。バートラムの自然描

写はロマン派の詩人たちの養分だったわけである。

バートラムの『旅行記』は、18世紀を通して数多く書かれた旅行記との関連もあれば、博物学書としての意味合いもある。先にも論じたように、こうした読み物はその後イギリス文学研究の対象からは外れていった。コールリッジの詩が研究され、その影響が明らかになる中で、初めて再び言及される書物となった。20世紀のイギリス文学研究において、コールリッジやワーズワスはキャンオンであり、彼らの作品が第一義である。こういった状況でバートラムの著作がどのように言及されたか、といえば、例えばJ.L. ロウズ(John Livingstone Lowes)のソース・スタディ(*The Road to Xanadu*, 1927) がある。ここでは、コールリッジの記憶の深層に蓄積されたバートラムの『旅行記』の様々な描写が想像力を通して詩的表現へと昇華されるといった捉え方によって記述されているが、『旅行記』を独立した文学的世界として見る視点はない。

それではコールリッジやワーズワスが生きた時代、彼らはイギリス文学をどのように知ったのか。先に上げたアンソロジーの類は、イギリス文学の作品を包括的に知る際に有益だった。しかしケンブリッジ大学に進学した知識層の彼らにとって、「イギリス文学」はカリキュラムの中に存在しなかったということも思いださなければならぬ。コールリッジがマージナリアを残したものに、当時比較的廉価で入手しやすかったイギリス文学作品の選集の一つである、ロバート・アンダーソン(Robert Anderson, 1749-1830)の『イギリス詩人選』(*The Works of the British Poets*)がある⁴²。コールリッジのマージナリアは、アンダーソンのエドワード・ヤング(Edward Young, 1683-1765)の劇評にシニカルな喝采を送ったかと思えば、ミルトンの詩行には物質の根本が描かれている、と科学的解釈を記述し、ジェイムス・トムソンの詩について十分に書いていないのはアンダーソンがトムソンと同郷のスコットランド人だからだと酷評し、シェイクスピアのソネットについては、グレードを示すマークをつけて一

一つ一つを評価している。このようなコールリッジがこの選集に書いたマージナリアの一部からでも、フォルマリスト批評の中心人物と見られたコールリッジが、同時代の「イギリス文学」選集をどう読んだかが推察されるわけであるが、彼の場合は自由自在の読解の態度であり、文学という概念におそらく定型はなく、また文学作品を読む視点にもおそらく制限はない。

コールリッジの著述が、どのような歴史性をもっているかについて考えるには、テキスト閉じたものと考えるところからは何も見えてこないことは、マージナリアの事例で分かるだろう。バートラムの『旅行記』へのマージナリアは、複数の文脈が交錯する中で書かれており、その複数の文脈を同時に理解しないと全体を理解することが出来ない。ワーズワスらとの友人関係、湖水地方の環境、セアラ・ハッチンソンとの関係、そしてコールリッジの心を去来しているだろうバートラムの著作の内容、散文が詩となる、という詩の本質への洞察等々、これらの文脈の一つ一つは、コールリッジの個人史によって輪郭が生みだされるだろうが、それ以上に全体として、旅行記として書かれたものが18世紀以来どのように歴史的に受容されたか、といった面からの相対化もできるだろう。コールリッジの場合、一つの事項に多くの関連した思考が展開しており、その思考をたどることは、20世紀のイギリス文学研究の制度化が一つまりその中で『コールリッジ全集』その他の彼のテキストの発行がなければ可能ではなかった。20世紀のイギリス文学研究は、当初の目的をはるかに逸脱するコールリッジのいわば非定形なテキスト性とでもいうべきものを明らかにしたわけであるが、この事例は、文学作品は本来あらゆる解釈に向かって開かれており、またあらゆる歴史的事項とも関連付けて考察しうることを強く示しているものであることは明らかである。関心の広がる領域の背後に、おそらく展開しているだろう植物学や博物学の歴史的展開が見えてくるだろう。イギリス文学における植物表象の生成を、モノとしての植物とのかかわりを歴史的に

明らかにすることで考察する、というアプローチの前提には、手際良くまとまったイギリス文学作品のアンソロジーから見られるキャンノン生成の制度的政治力学を、いったん取り外して臨む覚悟が必要なのである。そして、文学作品の描写と、関連するかもしれないがばらばらに見える様々な事項を、歴史的因果関係の中で何重にも丹念につなぎあわせ、意味を見出そうとする行為に留まり続けることが肝要である。

本研究はJSPS科研費 基盤B26284042、および挑戦的萌芽24652061の助成を受けて行われた。

¹本稿では、“English Literature”を「イギリス文学」と表記し「英文学」とは表記しない。本稿は英米における研究動向を主に考察するものであり、「英文学」という名称は日本におけるイギリス文学研究が歴史的に制度化してきたことと密接に関わっている。英米の研究動向を「英文学」がどのように受容したかについては、別途議論が必要である。

²例えば、ウェストの “Stowe, The Gardens of the Right Honourable Richard Viscount Cobham,” 1732 では、ストウ庭園の入り口にある木々のアーチや装飾の壺を通ったところにあるオレンジの木が言及されている。“Here, odorous Flowers perfume the vital Gale,/ And there Hesperian Oranges exhale. (ll.39-40, West 5)”「香り立つ花々」や「西方のオレンジ」が実際どのような花や果実を指すのか特定できないが、19世紀に出版されたストウの案内書では、入口近くにオレンジリーがあり、オレンジの木が多く育てられているのが言及されている (Stowe, 9)。Loudon によれば、17世紀後半から18世紀初頭にかけては、温室でオレンジを育てることが流行していたということである (Loudon, 864)。

³ Guy and Small, *Politics and Value in English Studies*, 101-102 参照。

⁴ この点については、Graffが強調している、イギリス文学の学部における分野別研究体制 (“field-coverage”) による教育、研究体制が影響していることも明らかである (“Preface: Twenty Years Later,” vii-xxii)。

⁵ Graffは、*Professing Literature*の中で、イギリス文学の学科の構成が、時代で分けられた研究対象分野やジャンル毎の専門家の閉じた集団の寄せ集めで成り立っていること (研究対象エリア規定原理, “the field-coverage principle”)、結果それぞれの専門家集団の間の軋轢を減少させたことが学部の運営に寄与したものの、異なる専門家集団が対象とする文学作品間のつながりを見えなくさせる弊害があることや、発展的な文学研究の形態を生みださなかったことについて詳細に述べている (5-15)。Graffの焦点はアメリカの教育体制下でのイギリス文学研究の現状にあるが、外国語としてのイギリス文学の研究においても、研究・教育体制は英米から移入されるわけであるから、問題点は同様に存在すると見てよい。また、Graffの議論を敷衍すれば、思想的な流れを文学研究に取り入れることが困難であるという状況も浮かび上がる。

⁶ フェミニズム批評や多文化主義によって、イギリス文学のキャンソに新たに加えるべき作家・作品についての議論が盛んになったのは、1970年代以降であるが、John Guilloryが *Cultural Capital* において指摘するように、一定のキャンソの是非を問う議論が起こる状況になったことそのものが、「文学」

と呼ばれる文化資本が示す人文学的知の形の危機を示している、という視点はすでに多くの研究者によって共有されている。

⁷ イギリス文学史の非歴史的な特殊な性質については、Court, *Institutionalizing English Literature* および Guy and Smallを参考のこと。

⁸ Guillory, 85-133にグレイの詩を通して見たキャンソ形成が詳細に述べられている。

⁹ Snow, *The Two Cultures and A Second Look* 参照。また、最近の議論としてはOrtolano, *The Two Cultures Controversy* がある。

¹⁰ たとえばCourtが *Institutionalizing English Studies* で論じているように、イギリスの18世紀におけるスコットランドにおける「イギリス紳士」の教育のモデルをアダム・スミスから考えた場合と、アメリカにおける移民の文字教育も含んだ教育現場におけるアーノルドの教養理念を考慮する Graff の議論は、イギリス文学研究の成立過程を対象としているにもかかわらず、その論述内容や視点は大きく異なる。おおざっぱに見れば、イギリスにおいては階級や帰属する社会の間の軋轢と、社会的上昇への欲求という社会構造や経済状況の変化が、イギリス文学が教育現場で採用される背景にあったと考えられる。良く書かれた書物を読むことは、自己研鑽の手段であり、経済的、社会的地位の上昇に伴ってより深い教養を求める心性がそこには読みとれる。一方アメリカでは、19世紀の後半以降、高等教育機関のカリキュラムを作り上げるなかで、イギリス文学をどのように組み入れていくなかが問題となっていた。文芸批評理論を重視する傾向がイギリスに比して非常に強いことは、大学教育における専門性を追求する方策とも見ることができる。

¹¹ Graff, *Professing Literature*, 3-4, Baldick, 18-58参照。

¹² 本論文における日本語訳はすべて著者によるものである。

¹³ 20世紀の前半には、科学史が人文的知識と自然科学の知識を媒介する学問分野として期待されていた。一事例として、Williams参照。また、この時代の科学史分野の代表的なものとして、Herbert Butterfieldの著作群が挙げられる。

¹⁴ “Arnold, Matthew,” by Stefan Collini, *Oxford Dictionary of National Biography* 参照。

¹⁵ Arnold, “The Twice Revised Code”参照。その他にアーノルドの視察官としての報告書には、*Reports on Elementary Schools 1852-1882*がある。

¹⁶ 1920年代のT. S. Eliot の批評活動からI. A. Richards, F. R. Leavis まで、アーノルド的ヒューマニズムの軌跡を読み取る

ことができる点は、現代では通説である。Baldick, 1-4. 参照。

¹⁷ 19世紀後半、アメリカの大学におけるイギリス文学のカリキュラムについての議論は、Hart, "The College English in English Literature, How It May Be Improved"を参照のこと。これは、当時イギリス文学を教える大学教育の現場から考察されたものである。

¹⁸ Court, *Institutionalizing English Literature* "Introduction," 1-16にこの点に関する概略がある。Court は特に、スコットランドにおける英語(文学)教育を重視している。

¹⁹ West およびShenstone 参照。ちなみにこれらの詩人の作品は、殆ど現代のアンソロジーに採録されることはない。

²⁰ 18世紀半ば、エセックス州の商店主であり、日記を付けたトマス・ターナー (Thomas Turner, 1729-1793) も、読者の一人であった。彼の読んだ英語版にはトゥルヌフォールの伝記が付けられており、ターナーはその概要を日記に書きつけている (Diary, 5-6)。

²¹ イギリス文学におけるアンソロジーについては、Korte (ed.) *Anthologies of British Poetry*、特にBarra Korte, "Flowers for the Picking: Anthologies of Poetry in (British) Literary and Cultural Studies," 1-32 が包括的な視点を提供している。

²² Stefanie Lethbridge, "Anthologidial Reading Habits in the Eighteenth Century: The Case of Thomson's Seasons," Korte, Barbara (ed.) *Anthologies of British Poetry*, 89-103参照。18世紀の読書習慣一般については、Brewer, *The Pleasure of the Imagination*, 特に167-197参照。Brewerは、18世紀の読書が、出版物の流通が格段に増えたことによって、'intensive reading'から'extensive reading'へ変化したと指摘している(169)。

²³ ドズリーの出版活動については、Benedict、特にChapter Four, "Reading Systems in the Mid-Eighteenth Century, Authoritative Collections: Dodsley and Eminent Ladies"を参照。

²⁴ 18世紀の後半、特に進んだエンクロージャーの目的は、土地を改良して収益を上げることがあったが、エンクロージャーによって土地を美的に整除することは眺めを整えることでもあり、風景庭園の一部を改良することでもあった。たとえば、庭園デザイナーのHumphry ReptonがOultonの地所に行った改良がその一例である。Daniels, 243-244参照。

²⁵ Lethbridge, "Anthological Reading Habits in the Eighteenth Century" in Korte (ed.) およびThomas Turner参照。

²⁶ George Ellis, by J. M. Rigg, rev. Rebecca Mills, *Oxford Dictionary of National Biography*参照。

²⁷ Court, *The Scottish Connection*, 1-5参照。

²⁸ Warrington Academy のカリキュラムは、Sell, et.al.(eds.) *Protestant Nonconformist Texts Volume 2*, 333-335に詳細がある。

²⁹ ワーズワスがこの本を宿屋の図書室から借りて選んで読んでいたことをドロシーが日記に書いている (Dorothy Wordsworth, *Journal*, 1, 132)。教科書としてだけではなく、19世紀初頭までこの選集は良く読まれていた。

³⁰ *The Norton Anthology of English Literature*は、1962年にM.H. Abramsの編集によって発行が始まった。2015年現在、第9版が発行されている。20世紀におけるイギリス文学関係の書籍の中で、群を抜いたベストセラーである。単純化して言えば、このアンソロジーに収録されていればキャンノン(canon)であると見ることもできる。21世紀になってからの第8版から9版へは収録方針に大きな変化があり、歴史主義的な視点も加味されている。このアンソロジーの編集史については、Shesgreen, "Canonizing the Canonizer"を参照。

³¹ 例えばBressler編の*Literary Criticism*では、New Historicism の項にCultural Materialism, Cultural Poeticsが含まれ、これとは別に、文学のみならず、哲学、生物学、社会学などの分野でも展開しているNew Materialismの動きもある。Bressler, Connolly参照。

³² Guillory は、審美的価値判断について語る時、人はその判断が、生産物とその流通の適正状態を考える経済学と共にあることを指摘している ("A concept of specially aesthetic value can be formulated only in the wake of political economy's discourse of exchange value," 316.)

³³ すでに刊行から半世紀が過ぎた、*The Norton Anthology of English Literature* の編集史は、このあたりの事情をよく語っている。Shesgreen 参照。2012年に出版された*Norton Anthology* の9th Editionでは、Anna Letitia Barbauld (1743-1825) の詩が多くおさめられているが、これは最近の収録である。1993年にGuillory は Barbauldを、「今日では誰もキャンノンであるとは思わない作家」("a writer no one would regard today as canonical," 103) と評しているところを見ると、当時のキャンノン形成の現場がこの詩人に全く注意を払っていなかったということが良く分かる。このように、20世紀末にはおそらくほとんど文学上のキャンノンであるとは考えられなかった文学作品が、最新の*Norton Anthology* に収められているという事例は他にも多い。たとえば、The Victorian Age 中の"Empire and National Identity"とタイトルを付けられてまとめられたものがある。ここにはThomas Babington Macau-

layの“Minute on Indian Education”など、イギリス帝国主義に関連する文章が複数抜粋されているが、一時代前にはほとんど考えられない編集である(1636-1667)。

³⁴ 研究手法としてのNew Historicismへの批判はすでに多く出されているが、恣意性の問題については、Smithson (ed.), Patrick Brantlinger, “Cultural Studies versus the New Historicism,”特に 47-48参照。

³⁵ Levinson, *Wordsworth's Great Period Poems*, 37-41.

³⁶ 歴史的事実をどのように文学研究に価値あるものとして位置づけるのか、その基準はなにか、という点は常に問題となるところであるが、英文学研究においては、それは常に「権威」(authority)の問題と関連していることはすでに指摘がある。Guy and Small, *Politics and Value in English Studies*, 68-98. 参照。

³⁷ ワーズワスの所有していた植物事典として、Withering, *A Botanical Arrangement* が知られている。Dorothy Wordsworth, *Journal*, 1: 346および、Buchanan, *Wordsworth's Gardens*, 50参照。

³⁸ Graffおよび、Hart参照。Hartの議論は1884年のものだが、当時すでに時代区分別の研究・教育が推奨されている。

³⁹ “Bartram, William” by Marcus B. Simpson jun. *Oxford Dictionary of National Biography*参照。

⁴⁰ Bartram, xv.

⁴¹ Cantor, *Quakers, Jews, and Science* 96-97参照。

⁴² アンダーソンの詩歌集へのマージナリアは、Coleridge, *Marginalia*, 1: 37-87にある。

<参考文献>

- Arnold, Matthew. *Culture and Anarchy: An Essay in Political and Social Criticism*. London, 1869.
- . *Essays in Criticism*. London, 1865.
- . *Reports on Elementary Schools 1852-1882*. London, 1889.
- . "The Twice-Revised Code," *Fraser's Magazine* vol. 65 1862 (March), 347-365.
- Baldick, Chris. *The Social Mission of English Criticism: 1848-1932*. Oxford: Clarendon Press, 1983.
- Bartram, William. *Travels through North and South Carolina, Georgia, East and West Florida, the Cherokee Country, the Extensive Territories of the Muscogulges or Oreek Confederacy, and the County of the Chactaws. Containing an Account of the Soil and Natural Productions of Those Regions; Together with Observations on the Manners of the Indians*. 1791; London, 1792.
- Benedict, Barbara M. *Making the Modern Reader: Cultural Mediation in Early Modern Literary Anthologies*. Princeton: Princeton University Press, 1996.
- Bressler, Charles E. *Literary Criticism: An Introduction to Theory and Practice*. 5th ed. Boston: Longman, 2011.
- Brewer, John. *The Pleasures of the Imagination: English Culture in the Eighteenth Century*. Chicago: University of Chicago Press, 1997.
- Buchanan, Carol. *Wordsworth's Gardens*. Texas: Texas Tech University Press, 2001.
- Cantor, Geoffrey. *Quakers, Jews, and Science: Religious Responses to Modernity and the Sciences in Britain, 1650-1900*. Oxford: Clarendon Press, 2005.
- Coleridge, Samuel Taylor. *Marginalia*. Vol.1. Ed. George Whalley. Princeton: Princeton University Press, 1980.
- Connolly, William E. "The 'New Materialism' and the Fragility of Things." *Millennium: Journal of International Studies*, 41(2013): 399-412.
- Court, Franklin E. *Institutionalizing English Literature: the Culture and Politics of Literary Study, 1750-1900*. Stanford: Stanford University Press, 1992.
- . *Scottish Connection: The Rise of English Literary Study in Early America*. New York: Syracuse University Press, 2001.
- Daniels, Stephen. *Humphry Repton: Landscape Gardening and the Geography of Georgian England*. New Heaven: Yale University Press, 1999.
- Dodsley, Robert, ed. *A Collection of Poems by Several Hands*. Vol.1. London, 1770.
- Drummond, John, ed. *A Collection of Poems for Reading and Repetition. Selected from the Most Celebrated British Poets, and Arranged in an Alphabetical Order*. Edinburgh, 1762.
- Enfield, William, ed. *The Speaker: or, Miscellaneous Pieces, Selected from the Best English Writers, and Disposed Under Proper Heads, with a View to Facilitate the Improvement of Youth in Reading and Speaking*. 1774; London, 1792.
- Graff, Gerald. *Professing Literature: An Institutional History*. Chicago: University of Chicago Press, 1987.
- Greenblatt, Stephen (general editor). *The Norton Anthology of English Literature*. 9th ed. Romantic Period, Eds. Deidre Shauna Lynch and Jack Stillinger. New York: W. W. Norton, 2012.
- . *The Norton Anthology of English Literature*. 9th ed. The Victorian Age, Eds. Catherine Robson and Carol T. Christ. New York: W. W. Norton, 2012.
- Guillory, John. *Cultural Capital: the Problem of Literary Canon Formation*. Chicago: University of Chicago Press, 1993.
- Guy, M. Josephine and Ian Small. *Politics & Value in English Studies: A Discipline in Crisis?* Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- Hart, James Morgan. "The College Course in English Literature, How It May Be Improved." *Transactions of the Modern Language Association of America*, 1 (1884-85): 84-95.
- Korte, Barbara, ed. *Anthologies of British Poetry: Critical Perspectives from Literary and Cultural Studies*. Amsterdam: Rodopi, 2000.
- Levinson, Marjorie. *Wordsworth's Great Period Poems*. Cambridge: Cambridge University Press, 1986.
- Lowes, John Livingstone. *The Road to Xanadu*. 1927; Princeton: Princeton University Press, 1986.
- Loudon, J. C. *An Encyclopaedia of Gardening; Comprising the Theory and Practice of Horticulture, Floriculture,*

- Arboriculture and Landscape-Gardening*. 1st ed. London, 1822.
- Milton, John. *Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. London: Longman, 1971.
- Ortolano, Guy. *The Two Cultures Controversy: Science Literature and Cultural Politics in Postwar Britain*. Cambridge: Cambridge University Press, 2009.
- Oxford Dictionary of National Biography*. Online edition. Oxford: Oxford University Press, 2004-15.
- Palmer, D. J. *The Rise of English Studies*. London: Oxford University Press, 1965.
- Sell, Alan P. F. et. al., eds. *Protestant Nonconformist Texts Volume 2: The Eighteenth Century*. Aldershot: Ashgate, 2006.
- Shenstone, William. *The Works*. 2vols. London, 1764
- Shesgreen, Sean. "Canonizing the Canonizer: A Short History of the Norton Anthology of English Literature." *Critical Inquiry*, 35(2009):293-318.
- Sloane, Hans. *A Voyage to the Islands Madera, Barbados, Nieves, S. Christophers and Jamaica, with the Natural History of the Herbs and Trees, Four-Footed Beasts, Fishes, Birds, Insects, Reptiles, &c*. 2vols. London, 1707.
- Smithson, Isaiah, and Nancy Ruff, eds. *English Studies/ Culture Studies: Institutionalizing Dissent*. Urbana: University of Illinois Press, 1994.
- Snow, C. P. *The Two Cultures and a Second Look*. Cambridge: Cambridge University Press, 1959.
- Stowe, *A Description of the House and Gardens of the Most Noble Richard Grenville Nugent Chandos Temple, Duke of Buckingham & Chandos*. Buckingham, 1832.
- Tournefort, Joseph Pitton De. *A Voyage into the Leavnt*. 3vols. Trans. John Ozell. 1718: London, 1741.
- Turner, Thomas. *The Diary of Thomas Turner 1754-1765*. Ed. David Vaisey. Oxford: Oxford University Press, 1985.
- Veaser, H. Aram, ed. *The New Historicism*. New York: Routledge, 1989.
- West, Gilbert. *Stowe, the Gardens of the Right Honourable Richard Lord Viscount Cobham Addressed to Mr. Pope*. London, 1732.
- White, Gilbert. *The Natural History of Selborne*. Oxford: Oxford University Press, 2013.
- Willey, Basil. *Nineteenth Century Studies: Coleridge to Matthew Arnold*. London: Chatto & Windus, 1961.
- Williams, L. Pearce. "The History of Science at Cornell University." *The History Teacher*. 13(1980): 379- 383.
- Withering, William. *A Botanical Arrangement of All the Vegetables Naturally Growing in Great Britain, According to the System of the Celebrated Linnaeus*. London, 1776.
- Wordsworth, Dorothy. *Journals of Dorothy Wordsworth*. 2vols. Ed. Earnest de Selincourt. London: Macmillan, 1952.

柑橘類、もしくは「異国の果物」について



J. C. Loudon, *Encyclpaedia of Gardening*, 1st ed.
(London, 1822), p.864 “Common orange”

オレンジをはじめとする柑橘類は、温暖で光の多い土地に生育する。ヨーロッパでも北方にあるブリテン島の風土になじまない植物である。オレンジやレモンが自生しないイギリスでは、常緑の葉を揺らしながらさわやかな匂いをふりまき、色鮮やかな果実を実らせる柑橘類の木々には、古くから憧れを持っていたようである。ヨーロッパに柑橘類が持ちこまれたのは近代の最初と考えられるが、これはアジアへの航路が開かれたこととも関連している。インドや中国などのアジア地域に、オレンジやレモンは古くは自生していた。

フランシス・ベーコン(Francis Bacon, 1561- 1626) は「庭について」(“Of Gardens,” 1625) というエッセイで、11月後半から1月にかけての常緑の木々として、「もし温室に入れるのであれば、オレンジの木やレモンの木、

そしてギンバイカ」(“...Orange-Trees; Limon-Trees; And Mirtles, if they be stoved”¹⁾) も良いと述べているが、この言及にもあるようにオレンジなどの柑橘類は庭園の中の常緑樹としてよく用いられていた。後年、オレンジの並木として最も有名になるのは、ヴェルサイユ宮殿の庭である。17世紀の後半、壮大なオランジェリが建てられ (L’Orangerie du Château de Versailles)、大きな植木箱に植えられたオレンジの木は、歩道の両脇を飾り、花の時期にはかぐわしい匂いを風にそよがせた。王を喜ばせるために、一年中オレンジを実らせることも努力されたようである。

チェルシー植物園の主席ガーデナーを長く務めたフィリップ・ミラー(Philip Miller, 1691-1771)の『園芸辞典』(*The Gardeners Dictionary*) は、19世紀になるまで改訂され続けたロングセラーであった。この辞典には、“AURANTIUM”の項にオレンジの木が載っている²⁾。ミラーによれば、リンネはオレンジをレモンと同じシトラス類(Citron)の一つとして分類しているが、ここではオレンジを次の5種に分けるとして、1) The Seville Orange [ダイダイ、セビリャオレンジ]、2)The China Orange [カラマンシー]、3)Willow Leaved Orange (the Turkey Orange)、4)The Pumpelmoes (Shaddock) [ザボン、ブントタン]、そして 5)The Dwarf (Nutmeg Orange)を挙げている³⁾。1)が酸っぱいオレンジ、2)が甘いとされる。

そしてミラーの辞書では、オレンジの季節ごとの手入れや、古いオレンジの木の剪定方法など、細かな情報を並べているのだが、これらはどれも温室で育てる常緑樹としての栽培方法である。水やりに気を使い、毎年鉢植えの土を全部変えて、根を切らないように古い土を丁寧にふるい落とし、用意した新しい土を入れて

植え直す、等々、どうもここで目標とされているのはヴェルサイユの庭師たちの仕事のレベルではないか、と思われるほど念が入った指示がなされている。とはいえ1783年、ブライアント(Charles Bryant)の本では⁴、オレンジの木は常緑で、自生するところでは毎年花を咲かせ実をならせるが、「とてもお金をかけないと、ここでは完璧な果実を生産できない」(“they cannot be produced here to perfection, without much expence,”191)と、美味しいオレンジをイギリスで栽培することを半ばあきらめている。18世紀のイギリスの人々は、せめてオレンジの花の香りを、と願ったのだろうか。

19世紀前半の園芸ブームの立役者の一人だったJ.C.ラウドン(John Claudius Loudon, 1783-1843)は、1822年から『園芸百科事典』(*An Encyclopaedia of Gardening*)の発行を始めた。1822年版のラウドンの柑橘類に関する記事は、「良く知られているが、顧みられない異国の果物」(“Exotic Fruits, well known, but neglected as such”)という見出しから始まっている。この見出しから瞬時に分かることは、ラウドンが簡潔に、オレンジがイギリスから見れば外国の暖かい地方の果物であること、しかしそれは誰でも知っている果物であること、そして19世紀の初頭、栽培することが流行していないことを明示しているということである。そしてこのように続ける。

この見出しに含まれるのはオレンジ類であり、果物の中で最も美しく、また最も有用な部類の一つである。食卓に出すオレンジやレモンの栽培は、現在イギリスでは一般的ではない。しかし、我々の意見では、素人がこの栽培を試みるのは大変楽しいものである。というのも、デザートとして自分が育てた果物を見るという満足感とは別に、大きくて丈夫なオレンジの木に実がたわわになっていることよりも素晴らしい果物の木というようなものはないからである。

Under this head we include the orange tribe, one of the most beautiful, and also, a very useful class of fruits. The Culture of oranges and lemons for the table is not at present common in England; but, in our opinion, it might be pursued with much enjoyment to the amateur, since, independently of the gratification of seeing fruits of one's own growth at the desert, no object of the fruit-tree kind can be more splendid than a large healthy orange-tree covered with fruit(862).

ラウドンがオレンジを「有用」とするのは、ビタミンCが多く含まれているため水夫の壊血病を防ぐために船に積み込まれたといった事実も関与しているだろう。水夫の常備品という他にも、酸味の強いオレンジは一般的な薬用としても用いられていた。この百科事典が出た当時には、すでにイギリスにはオレンジが大量に輸入され、安価に手に入れることができたという報告がある⁵。オレンジの実が簡単に手に入るのであれば、自分で育てるまでもないかもしれない。イギリスの気候では栽培が難しいのである。すでにフランス革命から三十年以上経ち、ヴェルサイユの庭にあこがれる時代でもない。観葉植物としてでも栽培するのは、当時すでに中産階級の間にも園芸が広がっていたことを考えると、コストの面でも人手の面でも割に合わない。もっと簡単に、美しい葉を楽しむことができる植物が沢山イギリスに移入されていたからである。

ラウドンの記事では、オレンジ栽培の歴史が概観されている。オレンジは14世紀にイタリアに移入され、そのあとニースやジェノヴァ、ナポリなど気候の良いところに地植えで育てられたという。イギリスには16世紀頃にはオレンジの移入がなされたようであるが、最も古い逸話の一つに、サー・ウォルター・ローリー(Sir Walter Raleigh, 1554-1618)が持ち帰った種から栽培されたという伝説のある、サリー州のベディントン(Beddington)

に屋敷のあるカリュー家 (the Carew) のオレンジがある⁶。このオレンジは地植えで150年近く生えていたが、1739年から翌年にかけての大霜ですべて枯れてしまった。17世紀後半から18世紀前半、オレンジを温室で育てるのが大変流行したということであるが、それは常緑の植物の選択肢があまりなかったからだとラウドンは述べている。18世紀半ばになると、他の外国からの植物を育てることが人々に広がり、オレンジの木は急速に人気がなくなった⁷。ミラーの『植物辞典』にはオレンジブームの名残が感じられるが、ラウドンの記事ではそうしたことは歴史的な過去として扱われている。リンネが柑

庭園が18世紀の文化表象として庭の趣味を席卷したあと、フランスやスペインの匂いのする、もっといえばヨーロッパの南国のイメージに満ちたオレンジやレモンは、文化表象から消費財に転身して一般の人々の生活に入って行った。19世紀も半ばになると、古くヨーロッパからもたらされたオレンジの栽培が、フロリダで隆盛となり、オレンジ産業が成長することになる。

(石倉和佳)



J. C. Loudon, *Encyclopaedia of Gardening*, 1st ed. (London, 1822), p.867 “The Shaddock”

橘類をシトラスとして一つにまとめて分類したためか、ラウドンもオレンジ、レモン、ライム、ザボンなどを一つにまとめて論じている。

ベーコンが自分の庭にオレンジとレモンを生やすことを夢見た時から三百年がたつと、オレンジの実と花と香りに魔法のようにまとわりついていたオーラは、すでにすっかり消えていたということだろうか。イギリス風景

¹ Sir Francis Bacon, *The Essays or Counsels, Civill and Morall*, Ed. Michael Kiernan (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1985), 139.

² ここで使用しているのは、Philip Miller, *The Gardeners Dictionary*, 8th ed. (London, 1768) である。これはミラーの生前に出された最期の版である。

³ これらのオレンジの区別や種類については厳密には分らない。日本名は便宜的なものである。

⁴ Charles Bryant, *Flora Diaetetica: or, History of Esculent Plants* (London, 1783), 190-191.

⁵ Henry Phillips, *Pomarium Britannicum: An Historical and Botanical Account of Fruits* (London, 1820), 271.

⁶ ラウドンによれば、種からオレンジを育てて、実がなるまでにするのは非常に難しいので、この屋敷にあるオレンジはイタリアから輸入された苗木であろうと考えられているという(864)。ラウドンがこのオレンジにことさら言及するのは、育てにくいイギリスでこれほど長く生育させた、庭師たちの努力に敬意を払っているためであろう。

⁷ J. C. Loudon, *An Encyclopaedia of Gardening*, 1st ed. (London, 1822), 862-865.

